

国際理解

帰国・外国人生徒と一般生徒とが共に高め合える国際理解教育の推進

1 目標

帰国・外国人生徒と一般生徒が共に高め合える教育活動を通して、互いの国の文化や課題に目を向けさせ、持続可能な国際共生社会の実現に向けての実践的態度を養う。

2 ESDの要素と重視する能力・態度

① ESDの要素

<多様性>

情報網の発達により瞬時に世界中の情報を得ることができる。また、交通網の発達により、身近に様々な国籍の人々が生活する時代となっている。異国の文化を知り、価値観を理解してそのことから様々な考え方をもとに行動する必要がある。

<相互性>

世界が抱える様々な課題について理解して、生徒同士、生徒と教師、学校と地域、学校同士が互いに協力し、課題解決に向けた方法を探り、ともに取り組んでいく必要がある。

<連携性>

校区の特性を生かした様々な体験活動を通して、人と人のつながりの大切さを理解していくとともに、コミュニケーション力を向上させることによって、他の人々とのつながりがより持続可能な社会への発展につながることを知る必要がある。

② ESDの視点に立って重視する能力・態度

【コミュニケーション力】

自分の気持ちや考えを伝えるとともに、他者の気持ちや考えを尊重し、積極的にコミュニケーションを行う力

【他者を理解し、他者と協力する態度】

他者の立場に立ち、他者の考えや行動に共感するとともに、他者と協力・協働して物事をすすめようとする態度

【つながりを尊重する態度】

人・物・こと・社会・自然などと自分のつながり・かかわりに関心を持ち、それらを尊重し大切にしようとする態度

【国際協調・国際協力へすすんで参加する態度】

集団や社会における自分の発言や行動に責任を持ち、自分の役割を理解するとともに、物事に主体的に参加しようとする態度

3 概要

事例1：全校 “届けよう、服のチカラ” プロジェクト

7月5日（木）にユニクロの店長による出張授業を実施し、本プロジェクトの目的や取組につい

て全校生徒に説明をしていただいた。それを受けて、各学級から2名程度の実行委員を募り、実行委員会を発足した。そして、実行委員会において①ポスター・回収箱・協力依頼文等の制作、②全校集会・体育大会等における協力の訴え、③関係機関（市民センター・3小学校・幼稚園）への訪問と協力依頼や回収作業、④寄贈衣服の整理・発送等の作業を行った。その結果、約4ヶ月の期間に2,695着もの子ども服を回収し、贈ることができた。

この取組を通して、世界が抱える様々な問題（貧困・人権・環境等）について考え、「一人一人の力は小さくても皆で力を合わせることで、世界の平和や福祉に積極的に貢献できる」ことを学ぶことができた。



市民センター等に依頼



体育大会で呼びかけ



点検と箱詰め作業

SDGsアイコン



事例2：第1学年 JICA研修員との交流会

本校は、帰国・外国人受け入れセンター校として帰国・外国人の日本語指導を行うだけでなく、全生徒が異国の文化を学び、日本文化について再認識できる取組を行っている。その一つとして、例年、第1学年生徒がJICA研修員の方々と日本文化を通じての交流活動を行っている。

9月27日（木）に8名のJICA研修員を迎え、剣道や書道、折り紙、箸遣い、けん玉等の日本文化を紹介した。生徒はグループに分かれ、交代しながらJICA研修員に身振り手振りを交えて交流を行った。また、生徒は学習したばかりの英語を積極的に使って研修員とコミュニケーションを取り、笑顔と笑い声のあふれる楽しい時間を過ごした。

この活動を通して、自分の気持ちや考えを相手に伝えるとともに、他者の気持ちや考えを尊重して積極的にコミュニケーションを取ろうとする能力の育成につながった。



毛筆を使って“愛”



“けん玉”は難しい…



剣道部と“侍ポーズ”

SDGsアイコン



4 成果と課題

① 成果

“届けよう、服のチカラ”プロジェクトを実施して三年目となり、この取組もかなり定着してきた。各学級から選出した実行委員会の生徒は経験者が多く、実行委員長が一年間の活動内容を把握していたため、生徒の自主性に任せた活動ができた。この取組を通じて、自分たち一人一人の小さな力でも、世界平和や福祉の向上につながっていくことを実感することができたようである。

② 課題

ユネスコスクール推進指定校としての本校の取組を、保護者や地域に対して積極的に発信して理解と協力を深めながら、さらに活動の範囲を広げていきたい。また、これまでの実績を継承していくと同時に、他校の実践を参考にしながら新しい取組も取り入れていくなどして、マンネリ化しないような工夫が必要である。